

# 30代に思い切って転職した会社に、今でも里から通勤しています

大阪〈ゆうゆうの里〉

椎野ひさ子様（79歳）令和2年10月 一人入居

一番上の兄は16歳上

5人兄姉の中で育ちました。一番上の兄は16歳上です。兄は通つていた高校の教師、私は生徒という関係で、いわば父のような存在です。義姉が他界して、兄も70代で癌になり亡くなるまでお世話をしました。その時、「兄には私がいるけど、私が弱つたら誰が面倒を見ててくれるのだろう」と思つた

し、父はそれから二年後に亡くなりました。その時に銀行から戻ってきてほしいと連絡を受けました。

銀行から中国貿易を行う会社へ

銀行にパートとして再雇用されて働いているとき、取引先の中国貿易を行う商社から、事務ができる人を探して欲しいとの話がありました。日中友好条約が締結された後のことでの、それは成長が見込まれる会社でした。その時私は31歳、日本の企業は当時男女格差があり30年勤めても先が見えていたことから、応募を決めて面接を受けに行きました。これから会社の基礎を作つて行くことにはやりができると思ったのです。オーナーは「あなたのやりやすいようにしないさい」と言ってくださいました。オーナーは男女平等という思想を持つていたのです。思わず收入増もありました。その時、その

時で扱う商品はいつも違います。私はマンネリが嫌いだから、こうあるのは楽しいです。事務にとどまらず留守番中は営業もしていました。ハピニングが起つた時には、逃げずに誠実な対応をすれば相手は必ず受け止めてくれることも知りました。

コロナ禍の中での第三の人生を決断

私もまもなく80歳。第三の人生にあつた生活をと考えました。両親や姉、兄を家族でケアして見送りましたが私には子供がいません。このままでは自分は孤独死になるという不安が離れませんでした。ところが〈ゆうゆうの里〉の説明を聞きますとそんな心配は一切消えました。しかし昨年からのコロナ禍で新たな不安が生じました。今まで病気知らずでかかりつけ医もないことが私の自慢でしたが、万が一、何かあり陽性反応が出たら保健所に行つて病院へと一人で動くことはできるだろうかという不安です。またコロナ禍で

金融資産の価値が下がつてしまわないかと気になりました。そんな時幸運にも、里から電話があり空室の案内をもらつたのです。これはタイミングだと思って決断することができました。日ごとに「早く引つ越しして安心したい」という気持ちが強まりました。

少年たちの成長を励みにコンサートを応援しています

もし、自分の生活に支障ができたらケアしてもらえる。こんな安心な生活が保障されているのですから、私の生活にぴったりです。交通の便が良くて、今までの生活を何も変えずに会社にも通えるので大満足です。



通勤時、里から駅に向かう椎野様（撮影のためマスクを外していただきました）



中国・広州に出張したときの思い出の写真